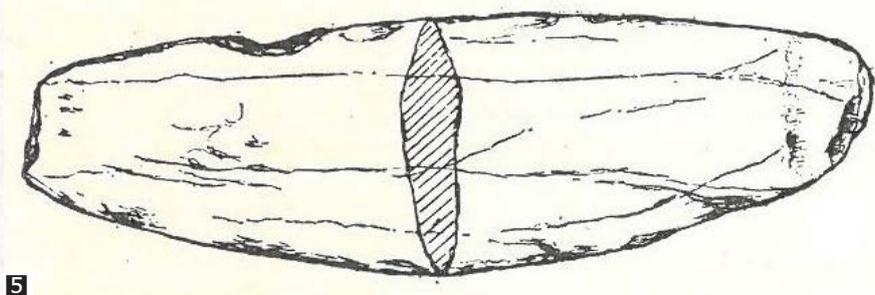
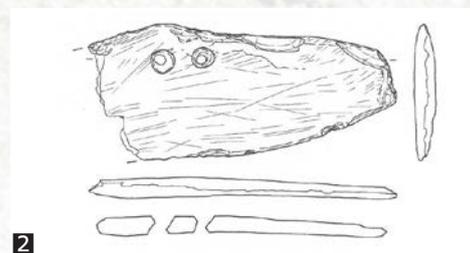




1



5



2



3



4

- 1 胆沢南都田清水下遺跡（上の石庖丁のみ胆沢文化創造センター内の郷土資料館にて展示）
- 2 胆沢南都田石田 I・II 遺跡
- 3 水沢佐倉河胆沢城跡（市埋蔵文化財調査センターにて展示）
- 4 水沢佐倉河杉の堂遺跡
- 5 水沢姉体町橋本遺跡（未完成品）



奥州遺産

— ときを越え

受け継がれるもの —

第136回

弥生時代の石庖丁たち

— 胆沢清水下遺跡ほか —

弥生時代に稲穂を摘む農具として使用されていた石庖丁。九州から近畿地方にかけて広く分布し、関東から中部地方を超えて、東北南部の太平洋側にまとまった分布域を形成する。このような変動的な分布がなぜ起ったのか詳しいことは分かっていない。しかし、少なくとも石庖丁が分布する範囲においては、九州北部と同様な方法で水田稲作が営まれていたと考えられる。

石庖丁が分布する太平洋側の北端は奥州市であり、胆沢扇状地の低位段丘を中心に、現在5遺跡から6点が確認され、仙台平野以北では最も石庖丁を保有する地域となっている。

南都田・佐倉河周辺は、小河川や湧水が多く、水が引き易かったため弥生時代から水田稲作が定着したのだろう。続く古墳時代でも早くから集落が形成されるのも、この地域周辺であり、当時から安定した稲作地帯が形成され、やがて角塚古墳の造営に結び付くのだと思われる。

広告